総則部会

＜県研究主題＞
学習指導要領の内容を踏まえた教育課程の編成と教育活動の工夫・改善

提案１　　提案者　林　ますみ（県西地区）

＜研究主題＞
「確かな学力」の育成を図る教育課程の編成の工夫・改善
～個に応じた指導の充実、学習習慣の確立～

１　提案内容

基礎的・基本的な学習内容の確実な定着を図るために、長期休業・放課後等を利用した学習指導の展開や特別支援教育非常勤講師・個別支援員等による個別指導等の具体的取組を行っている。

（１）習熟度に応じた個別の学習指導

習熟度に応じた個別の学習指導とは、基礎的・基本的な知識・技能の習得に課題があり、学習の遅れがちな生徒を対象に一斉指導とは別に、別室で行う指導である。個別の学習指導を行うことにより、基礎的・基本的な知識・技能の習得を図り、「わかる喜び」を味わわせ、学習意欲を喚起させる。

【取組方法】

①　本人・保護者からの希望、学年職員・教科担当の判断により対象生徒を決定する。

②　「生徒指導・支援会議」、「スタッフ会議」で指導方法を検討する。

③　個別学習指導の計画表（コーディネートカレンダー）を活用する。
（教育相談コーディネーターが、毎月コーディネートカレンダーを作成し、スタッフ会議で確認し、担任・教科担当に配布する。）

④　支援員（スタッフ）と教科担当は、朝の打合せや授業終了後の報告など、随時連携を取る。スタッフ会議では学習記録ノートを活用して、個別学習生徒の学習意欲や態度、学習内容の習熟の状況などの情報交換をする。

⑤　初めての保護者には、教育相談コーディネーター等により個別学習について説明を行う。特別支援非常勤講師、個別支援員が学習内容や生徒の様子などのコメントを作成、三者面談等で担任より保護者に連絡をする。

（２）学習習慣定着に向けての取組

授業評価アンケートからも「もっとわかるようになりたい。」という学習意欲を持つ生徒が増えたという結果が出ている。さらに、より多くの生徒が学習意欲を高め、充実感を持たせようにするために以下の取組を考えた。

【取組方法】

①　スタディー・タイム（ST）の設定
定期テスト２週間前から５日間、授業終了後３０分間の ST を設定した。
学習計画表、学習の記録、学習の振り返りを記入するチャレンジカードを使用している。

②　学習相談日の設定
定期テスト１週間前からの５日間、部活動を無とし、帰りの会後４５分間の学習相談日を設定し、生徒が自分で決めた１教科を自分で内容を決め学習に取り組む。対象は、本人の希望と教員の勧めに応じた者である。

（３）成果と課題

「わかる」という体験が、生徒の学習意欲の喚起につながり、数学・英語以外の教科でも授業中の発言や小テスト、ノートの取り方、提出物などの状況に変化が見られ、それがさらなる学習意欲へつながるといった好循環となっている。

一方で、個別の学習指導が軌道に乗るにつれ、支援員不足の状態になってきている。４人程度で個別学習を行うケースもあるが、習熟度に違いがあり、調整を図ることが難しい。支援員の増員を依頼するとともに、地域の方や学生による学習ボランティアを検討する必要がある。

ST を実施するにあたっては、各学年で、生徒の実態を踏まえた方法・内容で行った。事前にねらいや進め方の説明をするとともに、希望調査をとり計画的に準備を進めた結果、学習全般に、前向きに取り組んでいこうという生徒の姿勢が強く現れるようになった。

学習相談日については、ST での実践の成果もあって、生徒が自分の学習を進めるための課題を把握したうえで、その解決を図ろうとする取組が見られた。テスト期間終了後も、自分の課題や疑問点をそのままにせず、自分で解決していこうとする姿勢や、友達同士で疑問点をぶつけ合い、考え合う姿が見られるようになった。

これらの取組は、すぐに学力向上を期待できるものではないが、学習意欲の向上や学習習慣の定着には大変効果的な取組だと思われる。しかし、方法や内容についてはまだまだ検討を重ねる必要がある。特に、設定する時期や時間について、できるだけ無理のない計画を考えていきたい。

２　協議内容

Q:希望があってから、個別指導が開始されるまでの期間は？

A:ケースによって異なるが、毎月計画表を作成するので、それに間に合えば翌月から開始できる。

Q:つまずいているところまで戻って支援するとあるが、小学校の内容についての対応は？

A:小学校とも連携を図っており、教科担当や支援者が相談して選択・決定している。

Q:評価方法についての工夫について

A:定期テストは全員受ける。授業で使用している教材など、共通に使えるものは使うようにしている。学習ノートの使用など、こまめに情報の共有に努めている。

Q:自己肯定感を持たせるための工夫は？

A:教え合いの取組を授業にも取り入れ、「わからないことは恥ずかしいことではない」といった雰囲気ができてきている。授業や学級の雰囲気作りが大切。

３　まとめ

・生徒自らが自分の課題をとらえ、それにふさわしい学習の取組ができている。
・学校全体が一体となって取り組んでいる。
・教員間で情報を共有し、指導の打合せなどに充てる時間を確保できるよう、時間の効果的・効率的な利用等に配慮がされている。
・保護者へ、指導計画や期待される効果、取組の理由などを事前に説明している。
・「よく分かる」をポイントととらえ、学習習慣の確立、学習意欲の向上にむけた取組ができている。
・学習意欲は、教科学習の時間だけでなく、学級生活全体のなかで育つ。

さらに、今後の視点に家庭教育、家庭と連携した学習習慣の確立も視野に入れて、各校での教育課程の編成実施を図っていただければということをお願いしたい。

提案２　　提案者　石井　伸一（横須賀地区）

＜研究主題＞　子どもの分析に基づく教育課程の編成 ～生徒理解の深化に向けた時間確保をめざして～

１　提案内容

（１）テーマ設定の理由

本校は、「一小一中」の小規模校（通常学級７、特別支援学級２、生徒数２２５名）である。学校生活のさまざまな場面で「ねばり強く活動すること」や「自分自身を高めること」に課題がある生徒がおり、数年前には「学習に集中できない」「学校規律が守れない」状況になっていた。当時の学校評価アンケート（生徒・保護者対象）では、教職員に関わる評価について大変厳しい結果が見られた。

この状況を改善していくために、生徒一人ひとりを理解することで、教職員と生徒の信頼関係をつくることによって、子どもたちに安心して落ち着いた学校生活を保障し、学校教育目標とめざす子ども像の実現に迫ろうと考えた。「生徒を多面的・総合的に理解すること及び教員と生徒との信頼関係を築くこと」の具現化にむけて、「子どもと向き合う時間」の確保をめざし、学校体制で教育課程の編成を工夫した。

（２）実践内容

①　評価・評定の提示時期、三者面談の時期、定期テスト・課題テストの実施時期と定期テスト前の「補習」の内容を編成しなおした。（横須賀市は二学期制）

ア　評価・評定の提示時期を長期休業の前の７月、１２月、学年末とした。
　　三者面談は７月、１２月とし、１学期末と学年末には通知表を渡すこととした。

イ　定期テストは６月、１０月、学年末に設定した。（１０月は５教科のみ）
　　夏休み、冬休み後に５教科の課題テストを設定した。

ウ　定期テスト前の「補習」については、「質問会」形式から、内容を提示して生徒が学びたいものを選べる「学習会」形式とした。

②　「ゆとりの時間」を「子どもと向き合う時間確保」に充てた。

横須賀市は長期休業日を活用した授業日数増加に取り組んでおり、本校では２６年度夏休み３日、秋休み２日、冬休み１日の計６日間授業日を増やし、３６時間の「ゆとりの時間」を生み出した。その時間を次のように活用した。

ア　４月当初の学級活動の充実に活用した。（１時間）

イ　６月、１０月の二者面談に活用した。（８時間）

ウ　長期休業開始前、終了後の生徒と向き合う時間の確保に活用した。（４時間）

エ　１０月の文化発表会に向けた合唱練習の時間確保に活用した。（４時間）

オ　小中連携授業研究会に活用した。（６時間）

カ　三者面談日や３月の新年度準備に活用した。（５時間）

キ　家庭訪問を全学年実施することに活用した。（８時間）

（３）成果と課題

評価・評定の提示時期、テスト時期、三者面談時期を見直したことで、生徒が意欲的に学習するようになった。短い期間で生徒に目標を持たせ、評価・評定と三者面談の時期を合わせたこと、生徒一人ひとりの理解に合わせて、じっくりと学習支援した成果と考えられる。また、授業参観や学級懇談会などの学校行事に参加する保護者が増えてお

り、学校教育への関心や期待が向上していると考えられる。

「ゆとりの時間」を「子どもと向き合う時間」に充てることで、生徒との信頼関係を深めることができた。休み時間に気軽に話しかけたり、放課後に相談したりする生徒が増えた。学校評価アンケートでもすべての項目において数値の上昇として現れている。今後も学校の現状分析を日常的に行うことで、教育課程編成上の課題の早期発見・早期解決を目指していきたい。

２　協議内容

「ゆとりの時間」の活用での先生方の反応、共通理解を図るための苦労について。

横須賀市の政策で「ゆとりの時間」は作られた。「ゆとりの時間」の活用については「テストを３日間で実施」「成績事務の時間や会議の日の５時間授業」など、校務のための時間確保という意見が多かった。それを生徒理解の深化に向けた時間にと意思統一するまでには何度も会議を開き、長い時間がかかった。生徒指導に時間を費やすよりは、「子どもと向き合う時間」に使うのがより良いとして共通理解を図ることができた。

３　まとめ

子どもたちの荒れを生徒からのＳＯＳ・メッセージととらえて、生徒理解や信頼関係を築いていく取組が教育課程の変更改善につながった。とても勇気ある決断で、そのためには長い時間の職員間の話し合いがあった。学力学習状況調査の結果が伸び、学校が楽しいとのアンケート結果が増えており、信頼関係に努力した結果が実を結んでいる。学校の課題改善はどれだけ生徒の実態を把握しているかにかかっている。教育課程の編成は、一人ひとりの生徒が成長するにはどうしたら良いかとイメージし、その最大公約数をとると捉えたい。

研究協議

テーマ：個に応じた指導の充実と生徒理解の深化を図るための教育課程の編成

○まずは学校と地域で課題を共有し、めざす子ども像を明確にする必要がある。
○個に応じた指導を充実するためには学校と保護者との信頼関係が大切である。
○教員の授業力向上については、評価について正しく理解していく必要がある。
○取り出し授業等で支援していくためには３年間を見通して指導計画を立てる必要がある。
○生徒理解のために時間の確保が重要である。現状ではなかなか時間を見いだすことが難しいが、教職員が共通理解して取り組むことで、時間を見いだすことができるのではないか。
○教育課程編成の工夫には、教員同士で粘り強く協議し共通理解した上で取り組む必要がある。また、いつでも話せるような風通しのよい職場づくりが必要である。
○時間の確保については、どこの学校でも悩んでいる案件である。教員の多忙感を解消していけるよう工夫した取組をしなければならない。
○課題を担任一人で抱え込むのではなく、みんなで共有しチームで当たることが重要である。
○勉強が分かるようになるということは、子どもの充実感や自信を持たせることにつながるとても大切なことである。